

第15回

「商売の原点はうどん売り」

小学校の高学年くらいから家の商売の手伝いでうどん売りを始めた。毎日一〇玉が販売ノルマだった。それが終わるまでは友達と遊ばせてもらえない。さつさと売り捌いてしまいうコツはないか。しばらく経つといいアイデアを思いついた。

自転車引いてうどんの行商

繰り返しになるけど、オレの実家はうどん屋だった。うどん屋といっても製麺のほうだ。典型的な田舎のうどん屋で、なんとか食える程度に細々と商売しているような店だった。兄貴が二代目として店を手伝っていたが、家を出たり入ったりしてなかなか定着しない。実際には親父と母親が二人で店を切り盛りしていた。

これも何度も説明したが、オレは十一人きょうだいの一〇番目だった。一番上のきょうだいとは親子くらい年齢が離れている。そんなわけでオレが小学生になる頃には親父と母親は結構いい歳になっていた。二人だけで店の仕事をすべてこなすのは体力面でとてもしんどそうだった。

うどんは腐りやすい。だいたい一日保てばいいほうだ。作ったらその日のうちに売ってしまわないと捨てる羽目になる。もったいない。もともと、こしらえたうどんは店で販売していたが、それだけではいくらかも売れないから、そのうち自転車で近所を回って売り歩くようになっていた。

自転車の荷台にうどんが一〇玉入った箱をたくさん積む。一〇箱も積めば、結構な重さだ。引いて歩くのは容易ではない。年寄いた両親にとつて自転車でのうどん売りはかなりの重労働だったに違いない。可哀想だった。

だから小学校高学年くらいになると店の手伝いとして、両親の代わりにオレが自転車を引くようになった。毎日、学校から帰ってくるとすぐにうどん売りに出掛けた。一〇玉一箱を十二箱で合計一〇〇玉。これが自分自身

〈前回までのあらすじ〉 西瓜や梨、サツマイモを畑から採集するのが得意だった。どうすれば見張りの大人に見つかからないか。小さい頃から色々知恵を、どちらかという悪知恵を絞るのは天下一品だった。中学生になると校内で女の子たちの弁当の盗み食いにも手を染めた。こちらも全然バレずに時効を迎えることができた。

に課した一日の販売ノルマだった。友達と遊びたい気持ちを抑えて、来る日も来る日もうどん売り。「なんて親孝行な息子さんなんだ」と、当時は近所の大人たちに感心されたものだった。

両親を助けるために自分を犠牲にする模範的な少年。まさか、本当にそうだったら格好良かったんだろうな。でも現実は大いぶ違っていた。店の手伝いはいやでいやでしょうがなかった。放課後くらい友達たちと自由に遊びたい。それが本音だった。しかし、両親から課せられた「一〇〇玉の販売ノルマをクリアしなければ、遊ぶことを許してもらえなかった。毎日この仕事があったから少年野球チームには入れなかったし、中学校ではクラブ活動もできなかった。学校が終わったら真っ直ぐ家に帰って自転車を引いてうどん売り。近所

を回っていると、大人たちに馬鹿にされたり、「うどんなんか要らねえよ」って渋い顔をされたり、イヤな思いをすることも少なくなかったが、そんな生活を数年間我慢しながら続けた。

同級生たちに「お前ら、買え」

当時はいかに早くうどんを売り捌いて、友達たちと遊ぶ時間を作るかに一生懸命だった。一二〇玉売ってしまえば、あとは夕飯の時間まで好きなように過ごすことができた。とはいえ一二〇玉という数は半端じゃない。四人家族の家に一人一玉ずつ売ったとしても三〇軒必要な計算になる。

最初のうちはなかなか売売できなかった。しかしそのうち一〜二時間もあれば、すべて捌けるようになった。コッ？ そんなものはない。頭を使えばいい。どんなに好きな家でも毎日、はうどんを食べない。「この家は一日一回、この家は一週間に一回」といった具合に、うどんを食べるサイクルというのほだいたい決まっている。それをきちんと記憶しておいて、そのタイミングがきたら各家庭を訪問するだけだ。短時間で売り捌くためには大口の顧客が欠かせない。当時、オレにとつての最大の得意先は織屋さんと呼ばれていた紡績工場だった。そこで働く女工さんたちがうどんをたくさん買ってくれた。織屋さんに行けば、毎日コンスタントに数十玉は売れた。

一般家庭と織屋さんで合計七〇玉はかたかった。問題は残りの五〇玉をどう売り捌くか



中学3年生で自動車を運転できるようになった

だった。でも大丈夫。実は織屋さんのほかに、もう一つ得意先があったからだ。学校の同級生たちだ。うどんをのせた自転車で校庭にいくと、同級生たちがうどんを買ってくれた。そうやってみんながオレのことを助けてくれたのだ。「お前ら、買え」といって強制的にうどんを売りつける？ 確かにそんな日もあったな。ただし毎日ではない。どつしても売れ残ってしまった時だけだ。当時のオレは身体は小さかったけど、腕っ節が強く喧嘩がものすごく得意だった。地元では敵なしだったから、オレが差し出したうどんを「要らない」といって断れる同級生はほとんどいなかった。

こうして子供の頃はほぼ毎日うどん売りの手伝いをさせられたわけだが、本当にこの仕事がいやでいやで仕方なかった。しかし、いまとなつてはうどん売りにとても感謝している。うどん売りの経験が物流通業の仕事に役に立っているからな。

オレはどんな商売でも成功するためには日々

の「段取り」が大切だと思っている。「段取り」というのは準備や用意のことを指す。うどん売りの場合は、どういうルートを回れば、うどんを売売できそうか。過去の販売実績からそれを予想し、準備しておくことが「段取り」となる。「段取り」をせずに闇雲に売ろうとしてもうどんは売れない。

物流センターの運営も同じだ。予め出荷量を把握していれば、作業員の最適配置が可能だ。時間通りに作業を終わらせることもできる。ところが反対に「段取り」をきちんとせずに行き当たりばったりでやろうとすると、余計な作業員を配置してしまったり、逆に作業員が少ないうえに残業が必要になったり、無駄が生じてしまう。

中学生で自動車を運転

うどん売りのほかに、いまの商売に役立っていることといえば、自動車を運転できるようになったことだった。自慢じゃないが、オレは中学三年生で自動車を自由自在に操ることができた。自動車といっても運転できたのはクロガネとかダットといった三輪車だけだ。運転技術は通っていた中学校で習った。

三輪車を所有していたのは中学校の自動車部だった。当時、地元では自動車部がある中学校は珍しかった。車は村長さんがハイヤーとして使用していたのを役場から払い下げしてもらったものだった。前にも説明したが、オレはうどん売りの仕事があったため放課後に

部活動ができなかったから、自動車部の連中
にお願いで、空いている時間などに三輪車
で遊ばせてもらった。

中学生だから当然免許はもっていない。運
転の練習は一般道ではなく、もっぱら中学校
の校庭で行った。校庭は広いからハンドル操
作を多少誤っても事故にならない。練習する
には絶好の場所だった。当時はまだ自動車そ
のものが珍しい時代だったから、男子生徒の
ほとんどが三輪車に興味津々。そのため、少
しの時間を順番で三輪車に乗らせてもらった
記憶がある。

昔の自動車はいまの自動車と違ってエンジ
ンを起動させるのにとっても苦労した。特に冬
の寒い日はエンジンが掛かりにくく、エンジン
が暖まるまで一時間程度掛かることも少なく
なかった。運転そのものよりもエンジンを起動
させるコツを掴むことのほうがよっぽど難しか
った。

こうして運良く中学生の時に自動車の運転
を経験できたため、運転免許の取得は楽だっ
た。教習所に通わなくても試験は一発で合格
オレは三月が誕生日の早生まれだけど、運転
免許を取ったのは中学の同級生の中で一番目
に早かった。

もし中学校に三輪車がなかったら、運転免
許を取ろうという気にはならなかったはずだ。
その後トラック運送の仕事に興味を持たな
かったかもしれない。そもそも三輪車の運転を
始めたのは女子生徒たちに「格好良い」姿を

見せたかったから。オレだけでなく、ほかの男子
生徒たちも似たような動機だったに違いない。

当時の男子生徒たちはみんな、だいたい同
じ女の子に好意を寄せていた。どんなタイプの
娘が人気だったのか？ それは昔も今も変わ
らない。一言でいえば、可愛い娘だ。オレが
好きだった娘の名前はもう忘れてしまったが、
学校ではアイドルのような存在だった。その娘
に何とかいいところをアピールしようと思って、
みんなで競ったことの一つが三輪車の運転だ
った。

いまと違って昔は学校の中で男子生徒と女
子生徒が会話を交わすことなんてほとんどな
かった。特に田舎の学校ではそうした傾向が
強かった。用件を伝える程度の会話はあった。
しかしみんなの前で男女が個人的な話をする
ことはない。必要な場合は校舎の裏などに隠
れて会話をするような時代だった。男子生徒
と女子生徒が互いに好意を寄せていても「付
き合っ」ことには発展しなかった。

反対され続けた結婚

結婚したのは二三歳。それまでそれなりに
女性と付き合ってきたが、なかなか結婚まで
には至らなかった。結婚すれば、食べることに
困らなくなるだろうと考えていたから、オレは
早く結婚したかった。しかし、ことごとく相手
の親に反対され続けた。

結婚の話が持ち上がると相手の親がウチの
近所にオレの評判を聞きにくるんだ。ウチの



「ヤクザ者でも構わない」といっ
てくれた女房と23歳で結婚した

前は魚屋だったが、そこに買い物にきたふりを
して相手の親たちが魚屋の店員にオレのこと
を尋ねていく。「向かいのうどん屋の倅はどう
なんだ？」と。すると店員がこつ答える。「あ
んなヤクザ者とは結婚しないほうがいいよ。そ
れで結婚話はすべてパーだ。」

唯一、尻込みしなかったのがいまの女房だ。
オレのお袋は、女房に「ウチの息子は近所で
ヤクザ者といわれているが、本当に結婚しても
らえるのか」と聞いたらしい。それでも女房は
構わないといって結婚してくれた。だからいま
でも女房には頭が上がらない。

確かにオレは若い頃、色々悪いことをし
ていたが、警察の厄介になるようなことはして
いない。当時の悪さというのは許される悪さだ。
いまの若い連中とは違って陰險な悪さではな
い。愛嬌があった。被害を受けた相手が「仕
方ねえなあ」と笑って諦めてくれるような悪さ
だった。

映画の無料鑑賞なんていい例だ。オレは若

い頃、切符きりの人の目を盗んで映画館に侵入してタダで映画をみていたが、恐らく当時切符きりの人はオレのことを見て見ぬふりをしてくれていたのだろう。

ちなみに映画館にはこうやって侵入した。昔の映画はニュースのあとに近日公開となる映画の予告が入り、その後本番が始まる。ニュースと予告のあとにはしばらく照明がついている時間帯がある。そしていよいよ本番となるわけだが、オレが畳の座敷席に潜り込むのは本番の上映のために照明が消えた瞬間だった。消灯直後は目が慣れないため、しばらく真っ暗で何も見えなくなり、誰が侵入したか分からなくなるからだ。その間にオレは空いている座敷席に座ってしまう。

近所の大人から教えてもらった「うなぎ漁」も、許される悪さの一つだった。この「うなぎ漁」は自転車を使ったまったくのオリジナル。かつてやり方を間違った人が死んでしまったこともあった命懸けの漁だった。



小石を握りしめてパンチすると衝撃度が増すことを覚え、ケンカでは負けなくなった

まず自転車についている、ライトを点灯させるためのモーターにつながる電線を外して、その先端を手で持って川の中に入れる。そして発電させるために仲間に自転車を漕いでもらう。それによって川の中の水に電気が流れる。電気ショックで死んだうなぎがプカプカ浮いてきたら、それを捕獲するという荒手の漁だ。

自転車をついで使うと水中を流れる電流量が多くなる。その結果、うなぎもたくさん捕れる。ただし電流量が多くなると、それだけ川に電線を沈める役回りの人の危険度が増す。感電する恐れがあるからだ。感電しないようにするコツは肘を曲げた状態で電線を持つこと。腕を真っ直ぐにすると、電流が抜けていかずに心臓に入り、ショック死してしまうのだ。

うなぎは感電しやすいため、すぐに水面に浮いてくる。ただし電気が流れることで体内の骨が全部折れてしまい、食べにくくなるという弱点もあった。それでも当時、うなぎは貴重な食べ物だった。

喧嘩必勝法

しかし、喧嘩だけは今も昔も許されない悪さだ。オレは一七、一八歳になるまで毎日のように喧嘩をしていた。いったん喧嘩が始まれば、オレは相手が起きあがれなくくらいまでボコボコにしてしまう。傷害罪で捕まってもおかしくないくらいだった。

オレは身体が大きくなかったが、喧嘩が強かった。喧嘩のコツを掴んでいたからだ。例えば

ば、相手の番長は必ず子分たちを従えている。オレが最初に相手をするのはその子分のうちの一人だった。見せしめのため、そいつをめちゃくちゃにするまでぶん殴るんだ。すると、それを見た番長は腰が引けてしまい、使いモノにならなくなる。

身体の大きな相手と喧嘩するときは、相手の股間を攻撃した。男というのはココが一番弱い。攻撃の際は足で蹴るのではなく、手を使うようにした。足だとコントロールが難しいが、手なら確実にヒットできるからだ。股間を痛がっているうちにボコボコにしてしまえば、まず負けることはなかった。

いつ喧嘩になってもいいように、ズボンのポケットの中には常に小石を入れておくようにした。手のひらに小石を握ってパンチすると、握らない時よりも衝撃度が増すからだ。小石を握っているとベニヤのような板なら簡単に割ることができた。小石を握ると握らないのではそのくらいパンチ力が違った。

(以下次号に続く)



おおすか・まさたか 一九四一年静岡県浜北市生まれ。五六年北浜中卒、ヤマハ発動機入社。青果仲介業などを経て、七一年に浜松協通送を設立。九二年に現社名の「ハマキョウレンクス」に商号変更した。二〇〇三年三月に東証一部上場。主要顧客はイトヨーカ堂、平和堂、ファミリーマートなど。流通の川下分野の物流に強い。大須賀氏は現在、静岡県トラック協会副会長、中堅トラック企業「全国ネットワーク組織」のJTPロジステイクスの社長も務めている。ちなみにタイトルの「やらまいか」とは遠州弁で「やっつけてやる」という意味。